

沖縄空手振興ビジョン

(2018年度～2037年度)

2018年3月

沖縄県

目 次

1	はじめに	
(1)	沖縄空手振興ビジョンを策定する目的と背景	1
(2)	ビジョン策定の意義	2
(3)	ビジョンの期間	2
(4)	ビジョンの位置づけ	3
2	基本理念	
(1)	基本理念	4
(2)	めざすべき3つの将来像	5
3	めざすべき将来像と推進戦略	
(1)	【保存・継承】	
	空手の型に秘められた精緻な技と平和を希求し 礼節を重んじる精神性が正しく次世代へ受け継がれている	7
(2)	【普及・啓発】	
	空手を取り巻く環境変化を的確に捉えた施策の推進により 世界の空手家が「空手発祥の地・沖縄」を認識している	13
(3)	【振興・発展】	
	空手家が豊かな人生を歩む「空手の聖地・沖縄」が 確立されて空手による産業振興が図られている	18
4	ビジョンを実現するための体制の構築	
(1)	空手家、空手関係団体、県、経済界等の協働体制	25
(2)	空手関係団体と県の役割	26
(3)	ビジョン実現に向けたロードマップの策定	27

5 現状と発展可能性

(1) 平成 28 年度沖縄伝統空手・古武道実態調査報告書結果 28

(2) 沖縄空手会館 28

【資料編】

1 はじめに

(1) 沖縄空手振興ビジョンを策定する目的と背景

海洋島しょ圏である沖縄は、過去の時代から、東アジアの中心に位置する地理的環境を生かし、周辺諸国との交流を通じて個性豊かな独特の文化を発展させてきました。

その一つである空手は、厳しい鍛錬を通して身体を鍛えるとともに、心を磨き礼節を重んじる「平和の武」として国内外に広く普及し、現在では、空手愛好家は世界中で1億3千万人いるといわれています。

沖縄を発祥の地とする空手が、世界中の人々を魅了するのは、沖縄に古くから伝わる「空手に先手なし」の理念に表される平和を希求する心や、先人によって創造され受け継がれてきた空手の真髄ともいえる型が、見る者の心に深い感動を与える美しさを持つとともに、型に秘められた精緻な技を解釈し身につけたいという思いを人々に抱かせることと、厳しい鍛錬を通して得られる本当の自信と人格形成につながる思いやりの心が育まれるからだと考えられます。

2016年4月に、沖縄県は、伝統文化である空手の保存・継承・発展を図るため、空手に特化した振興施策を推進する専任課として、空手振興課を設置しました。また、同年6月には、沖縄県指定無形文化財「沖縄の空手・古武術」の保持者による保存会が結成されました。

2016年10月23日の空手の日記念演武祭において、国内外の空手家が沖縄に集結し、集団演武による3,973人のギネス世界記録を達成したことは、空手振興施策の成果の一つとして記憶に残るところとなっています。

また、2017年3月4日にオープンした沖縄空手会館を拠点として「空手発祥の地・沖縄」を世界に発信するとともに、沖縄での修行を希望する空手愛好家の受入体制の強化に取り組むこととしています。

さらに、2018年8月には、世界中の空手愛好家の交流の場を創出するとともに、今日まで受け継がれてきた沖縄空手の精緻な技と平和を希求する精神性を今後も正しく保存・継承し、将来にわたっての振興を図ることを目的として、第1回沖縄空手国際大会を開催します。

沖縄の空手家の努力によって、明治から大正にかけて国内に普及し、その後、

多くの空手家の活躍によって世界中に広がった空手は、2016年8月に、2020年東京オリンピックの正式種目として採用されました。

沖縄発祥の空手が、平和の祭典であるオリンピックの種目に採用されたことは、沖縄県民の平和への思いが世界中に届く絶好の機会となり、県民にとっても喜ばしいことと考えます。

今後、オリンピックの開催に向けて、ますます空手への注目度が高まるとともに、空手愛好家のさらなる増大が予想されるなか、県、空手関係団体、経済界等の様々な分野が一体となって、沖縄を発祥の地とする空手の保存・継承・発展を図る取り組みを戦略的に行うためには、めざすべき将来像となる沖縄空手振興ビジョンを策定し共有する必要があります。

(2) ビジョン策定の意義

沖縄を発祥の地とする空手は、その真髄である型の鍛錬を通して得られる精緻な技と人格形成に資することから、世界中の人々を魅了しています。

成果主義や競争原理が進み、時として勝つことが優先される現代社会においては、人々が生まれながらに有している慈しみや思いやりの心が、少しずつ薄れていくおそれがあります。この様な中、ひたすら自分自身と向き合いながら型を繰り返し行い、型の分解や理合について体得するため、他者との技の掛け合いを通して共に向上し、互いの尊厳を重んじ個性を認め合う空手の鍛錬は、人間力の回復と強化につながるものであり、このことが世界中の人々を惹きつけているものと考えます。

県、空手関係団体、経済界等の様々な分野が共通認識として、空手の価値と現状を確認し、協働のもと伝統文化である沖縄空手のめざすべき将来像を描くことで、戦略的かつ計画的に空手の保存・継承・発展を図っていきます。

(3) ビジョンの期間

本ビジョンの期間は、現在の30代、40代の空手家が中心となって、各団体や道場の運営、後継者及び指導者の育成にあたり始める50代、60代の将来をイメージし、空手家として、または、空手界全体としての「ありたい姿」、「あるべき姿」の実現に向けて取り組んでいくための期間として、2018年度から2037年度までの20年間とします。

(4) ビジョンの位置づけ

本ビジョンは、沖縄21世紀ビジョン及び同基本計画、沖縄県観光振興基本計画、沖縄県スポーツ推進計画、沖縄県教育振興基本計画と基本的な考え方、方向性に関して整合を図るものとして策定します。

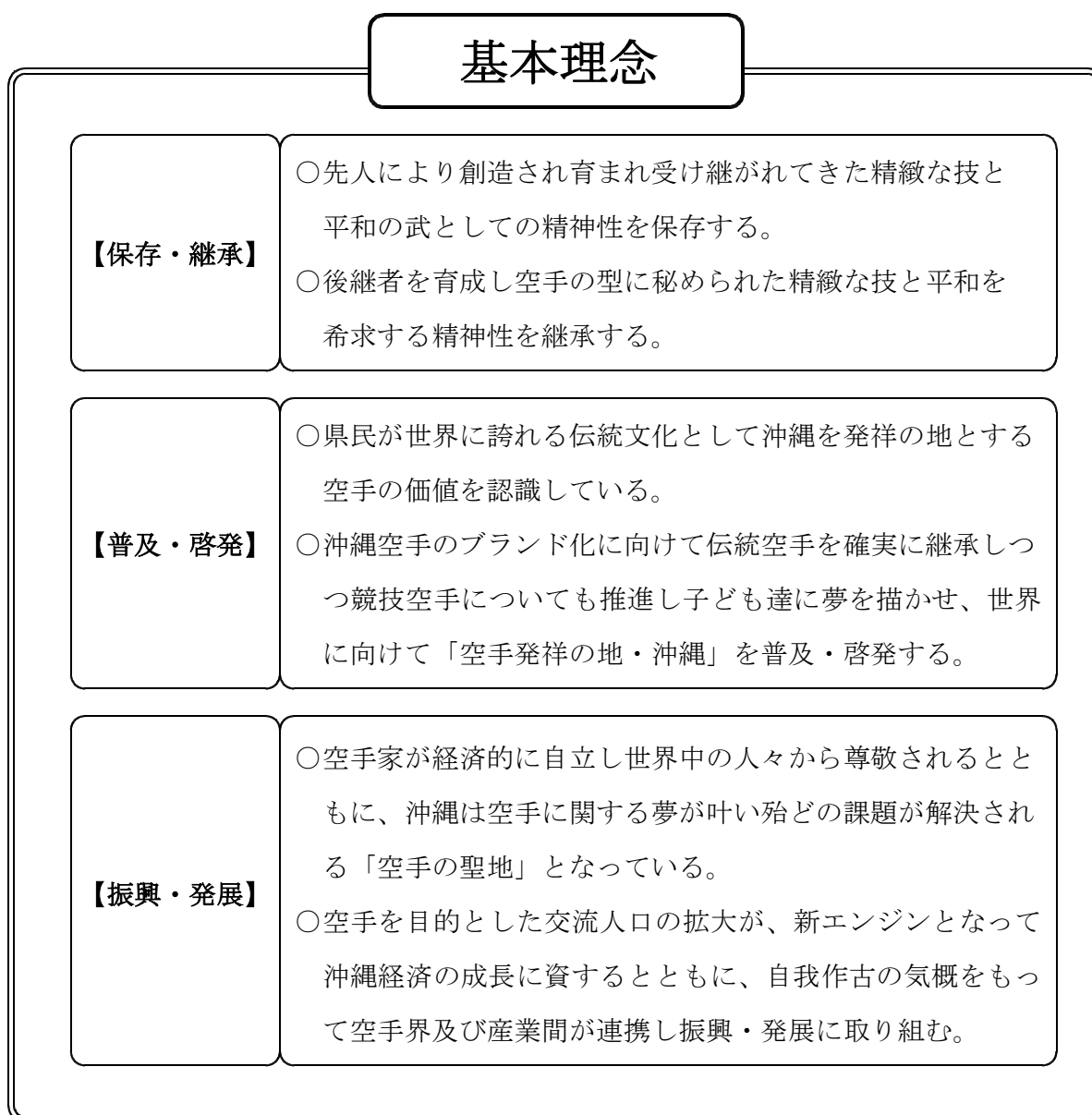
2 基本理念

本ビジョンの策定にあたり、沖縄を発祥の地とする空手の将来を見据えて守るべきもの、新たに取り組むべきものなど、今後、必要な施策を推進する際の根幹となる基本理念を定めます。

(1) 基本理念

基本理念を定めるにあたっては、ビジョンの軸となる、

【保存・継承】【普及・啓発】【振興・発展】の3つのキーワードを設定します。



(2) めざすべき3つの将来像

基本理念で定めた3つのキーワードのもとに、沖縄の伝統文化である空手の価値を県民のみならず世界の人々が認め、これまで以上に国内外に広く普及し、誰もが「空手発祥の地・沖縄」を認識するとともに、空手を目的とした沖縄への交流人口の拡大により、観光産業をはじめとする各種産業への経済波及効果が増大し、空手が沖縄経済を成長させる新エンジンとなっている。このような状態をあらわす将来像として次の3つを設定します。

【保存・継承】

空手の型に秘められた精緻な技と平和を希求し礼節を重んじる精神性が正しく次世代へ受け継がれている。

【普及・啓発】

空手を取り巻く環境変化を的確に捉えた施策の推進により世界の空手家が「空手発祥の地・沖縄」を認識している。

【振興・発展】

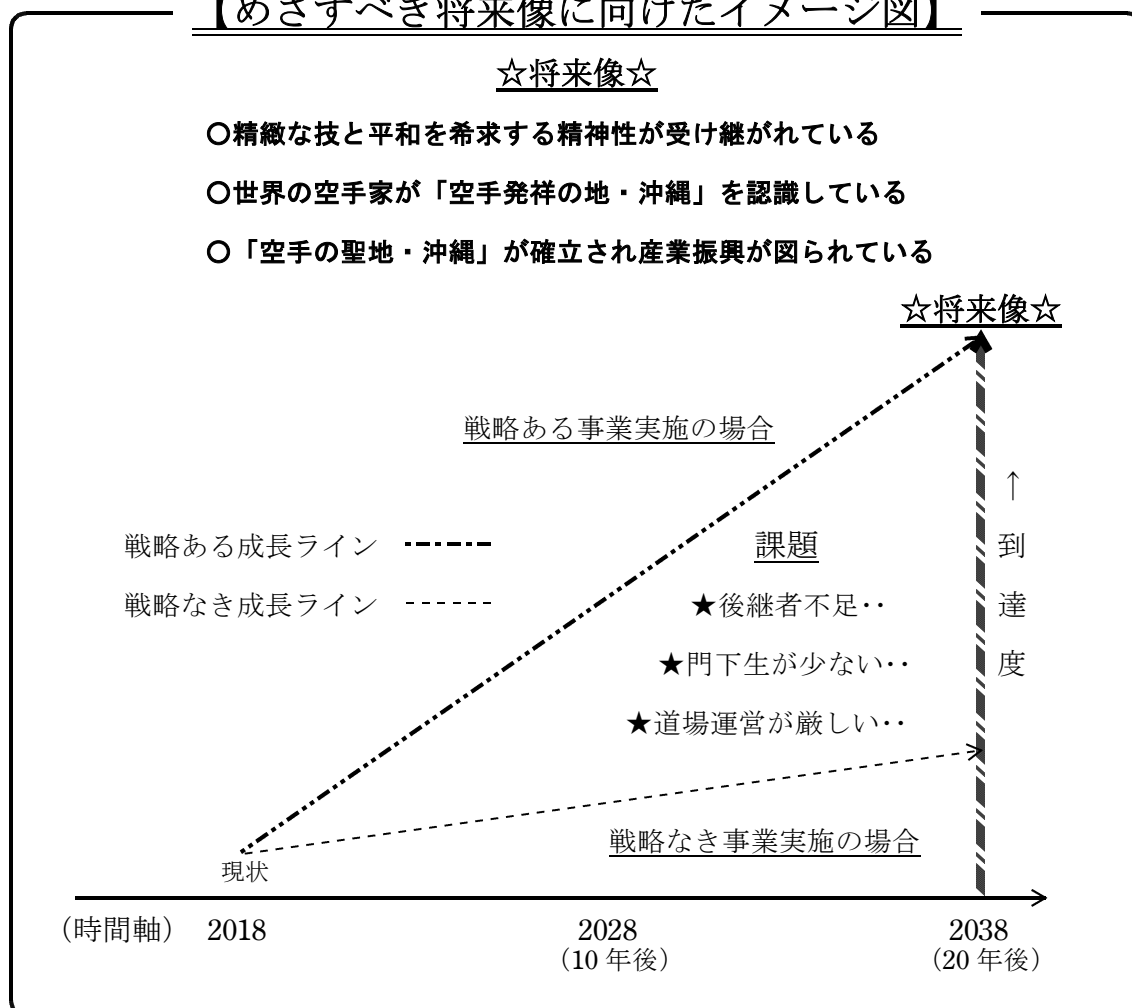
空手家が豊かな人生を歩む「空手の聖地・沖縄」が確立されて空手による産業振興が図られている。

これらの3つの将来像の実現に向け、県、空手関係団体、経済界等が一体となって必要な施策に取り組んでいきます。

3 めざすべき将来像と推進戦略

沖縄が世界に誇る伝統文化である空手を今後とも保存・継承・発展させるためには、今日まで受け継がれ未来に向け伝統として守るべきもの、そして世界に広がった空手の現状やオリンピックの正式種目として採用されるなどの時代の変化に応じて適切に対応すべきもの、さらに「空手発祥の地・沖縄」として道場運営の基盤強化及び産業振興を含め新しく取り組むべきものを明確化し、沖縄空手の「あるべき姿」「ありたい姿」として、めざすべき将来像を描き、その実現に向けた推進戦略を関係機関が一体となって構築します。

【めざすべき将来像に向けたイメージ図】



(1) 【保存・継承】

空手の型に秘められた精緻な技と平和を希求し礼節を重んじる精神性が正しく次世代へ受け継がれている。

ア めざすべき将来像

(技及び精神性の継承)

- 沖縄を発祥の地とする空手の型に秘められた精緻な技と、厳しい鍛錬を通して得られる自信と他者への思いやりの心、及び平和を希求する空手の精神性が沖縄の地で確実に受け継がれている。
- 空手の型に秘められた技や平和の武といわれる精神性が、沖縄の歴史性を踏まえ、読本や技術体系書及び指導體系書として整備され、人材育成に活用されている。
- 子どもから大人までライフスタイルにあわせた空手との関わりが持たれている。特に、幼少期から小学生にかけては礼節の心を学び、中学生は身体的発育に資する武術として伸びやかな動きを中心に活動し、高校生からは護身術として実際に用いる法を学んでいる。また、沖縄県民の健康長寿を増進させる手段として空手が活用されている。
- 空手の技と精神性を習得するために、世界中から多くの空手愛好家が来訪している。また、国内外の要請に応じて沖縄から指導者を派遣し、世界各地で指導する体制が確立されている。
- スポーツ科学の進展にあわせたトレーニング方法等を取り入れ、突き・蹴りなどの速度や身体動作の技術が高まっている。

(沖縄空手関係団体・流派・道場間の連携)

- 沖縄空手界の統一組織である沖縄伝統空手道振興会が組織運営の根幹となるビジョンを有し、事務局体制や運営基盤の強化が図られ、振興会の意思決定に会員の誰もが参加できるなど自主的な組織活動が行われている。
- 流派連絡会が定期的に行われ、型解釈の考え方や会派の情報交換が密接に行われるとともに、全道場主会が開かれ幅広い意見交換がなされることにより、沖縄空手界全体の意思決定と組織力が強化されている。

○道場は地域の中核的なコミュニティの場として門下生のみならず多くの人々が集い、安心と信頼に基づく豊かな地域社会の拠点として運営されている。

(公認段位制度)

○沖縄空手界における技量等を確認するための客観的指標である公認段位制度のあり方が整理され、世界でも権威のある段位授与制度が確立されている。

(ユネスコ無形文化遺産への登録等)

○沖縄県指定無形文化財「沖縄の空手・古武術」の保持者が適切に追加認定され保存会の事務局体制が拡充強化されることにより、保存継承にかかる活動が国内外において活発に行われている。

○沖縄空手の学術研究が深まることにより、伝統文化として平和を希求する沖縄空手の文化的価値と精神性が認められ、ユネスコ無形文化遺産に登録されている。

○沖縄を発祥の地とする空手が、世界各国の基準に基づき「平和の武術・平和の武道・平和のスポーツ」として認められ評価を受けている。

○世界の政治経済等のリーダーが精神修養等のため空手を学び、空手の鍛錬を通して習得した平和の心に基づき行動している。

(学術研究・体制)

○沖縄空手会館の展示施設に空手に特化した専門職員を配置して必要な資料を収集するとともに、詳細な分析・研究を行い学術的水準を高めている。

○国内外の大学に空手の専門学科又は学部が設置されるなど、高等教育として空手の学術研究がなされている。

イ 現状と課題

(技及び精神性の継承)

○沖縄県内では、門下生が増加している道場と減少傾向にある道場と二極化しているため、減少傾向にある道場の門下生を増やす取り組みが必要である。また、門下生の比率としては小学生が多く、中学からは部活や他のスポーツに転じることが多いため、継続させる取り組みが必要である。

- 空手の指導においては、各人の体格や性格、健康状態等の違いを踏まえつつ、子どもには礼節を重んじる心を育む徳育教育や姿勢、受け・突き・蹴り等の基本動作の習得を目指し、大人には護身術と空手の文化的価値、高齢者には健康長寿につながる稽古内容、外国人には伝統文化である沖縄空手の型や技の用い方に加えて、精神面を養うことの大切さを伝えるなど、多種多様なニーズにあわせた指導方法を考案し実行する必要がある。
- 憧れと期待を持って来訪した国内外の空手愛好家に対して、各人のニーズにあった指導を行うことにより満足度を高め、再訪意欲の醸成につなげるためには、指導者の質の向上を図る必要がある。
- 外国人空手愛好家のニーズに的確に応えられるよう、指導者の外国語対応能力の向上を図る必要がある。また、子どもたちへの指導方法について空手関係団体で研修会等を開催する必要がある。
- 空手が世界に広く普及している一方で、県内では後継者が不足していることから、将来的に沖縄だけで継承していくことが困難となる場合を想定して、国内外を視野に入れた継承のあり方を検討する必要がある。
- 道場運営による収入のみでは生計が成り立たず、資金不足のため道場の建て替えが困難であるなど、空手を生業とするのは厳しい状況にあることから、財源を含めた運営基盤の強化が必要である。

(沖縄空手関係団体・流派・道場間の連携)

- 沖縄伝統空手道振興会の規約に定められた「伝統空手、古武道の各流派連絡会」は設置されていない状況にある。国内外の空手愛好家に各流派の特徴を正確に伝えるためにも、同連絡会を設置し技術講習会や情報交換会を定期的に行う必要がある。
- 沖縄県が2016年に実施した「沖縄伝統空手・古武道実態調査」によると、2016年末現在、県内には386の道場があるが、このうち沖縄伝統空手道振興会に未加入の道場数とその約3割にあたる120となっている。未加入道場の同振興会への加入を促すためにも、全道場主会を開催し情報共有や意見交換を行う必要がある。

(公認段位制度)

- 空手関係団体等が独自に段位を発行している現状において、沖縄空手界で新たな段位制度を創設する趣旨や必要性、当該段位制度の創設によって得られる効果等について関係団体等と密接に意見交換を行う必要がある。
- 新たな段位制度の創設に当たっては、実施機関、審査員、審査基準及び方法等について関係団体等との合意形成を図りながら検討する必要がある。
- 沖縄空手界には 10 段所有者が多く、これまでに 130 名程度いるといわれているが、他の武道の段位のあり方と沖縄空手の段位のあり方について、各流派を超えて整理する必要がある。

(ユネスコ無形文化遺産への登録等)

- 沖縄県は「沖縄の空手・古武術」を県指定無形文化財として 1997 年に指定し、同年に 3 名、2000 年に 6 名、2013 年に 5 名を同文化財の保持者として認定した。また、2016 年には、空手・古武術の保存・伝承、調査研究等を組織的に行うため、同文化財の保持者等による保存会が結成されたが、現在、保持者は 5 名となっており、保存会の拡充を図り活動を活発化させるためにも適切に追加認定を行う必要がある。
- 「沖縄の空手・古武術」保持者の認定に当たっては、鍛錬を通して体得した型や技、精神性の体現を踏まえつつ、国内外における沖縄空手の普及・伝承を含めた認定基準を検討し制定する必要がある。また、同文化財保持者の型や技、伝聞を映像資料等で記録し保存する必要がある。
- 文化財保護法に基づく国の重要無形文化財指定の対象は、芸能と工芸技術であることから、武道としての空手の指定は厳しい状況にある。
- 沖縄の地で生まれ受け継がれてきた伝統文化としての空手の価値と平和の武である精神性の学術研究を深めることにより、ユネスコ無形文化遺産の登録に向けた取り組みを推進する必要がある。

(学術研究・体制)

- 沖縄空手会館の資料室に展示されている空手の歴史は、主に沖縄を発祥とする流派の解説となっていることから、国内外の来館者向けに他の流派の解説についても検討する必要がある。

- 沖縄が空手の聖地として世界中の空手愛好家に認識されるためには、型に秘められた技術や精神性の保存・継承及び普及・啓発を図るとともに、空手の歴史的及び文化的価値に関する学術的水準を高め、世界の知識層の満足度を向上させる必要がある。

ウ 推進戦略

(技及び精神性の継承)

- 道場主の指導理念や稽古内容、指導体制、道場の地理的環境等を総合的に勘案し、当該道場の特徴や有利性を最大限生かした広報及び運営を行うことにより、門下生の増加につなげる。
- 沖縄空手の技術を可視化し保存・継承に活用するため、型の技術体系書とDVDを揃えた教材を整備するとともに、指導体系書も策定する。精神性については、沖縄固有の歴史を経て平和の武といわれるに至った解説書として読本を作成する。
- 空手関係団体が制定している指導者育成のカリキュラムや、審判の資格基準及び研修方法、段位認定等の各種システムを参考にしつつ、沖縄伝統空手道振興会版の継承プログラムを策定する。また、最新のスポーツ科学を取り入れたトレーニングメニューの実施等により、空手の技術を向上させる。
- 型に秘められた精緻な技と平和の武としての精神性を継承するため、空手の修行者は、鍛錬を積み重ね心と技を磨き人間性を豊かにするとともに、国内外の空手愛好家が求めている型の運用法に加え、道徳的な指導も行う。
- 道場において技の継承と後継者の育成を引き続き行うとともに、あわせて、各流会派、各道場間で技術講習会や情報交換会を開催することにより、沖縄空手界全体で後継者を育成する仕組みを構築する。

(沖縄空手関係団体・流派・道場間の連携)

- 法人格の取得やライセンスビジネス等の展開により、沖縄伝統空手道振興会の事務局体制及び財務状況等の組織運営基盤の強化を図るとともに、同振興会を通して沖縄空手を保存・継承する道場へ適切な運営資金が供給される仕組みを構築する。
- 沖縄空手案内センター等が、国内外の空手愛好家を道場にコーディネートす

る場合には、指導者の空手の価値を適切に評価した指導料金体系を設定し、道場の運営資金として活用される仕組みを構築する。

- 国内外から訪れる空手愛好家に対して、沖縄で受け継がれてきた空手の技と精神性及び多様性を的確に伝えるため、流派連絡会を設置し技術講習会や情報交換会を行う。
- 伝統文化である沖縄空手の保存・継承を行うとともに、地域社会のコミュニティ施設として機能している道場の運営基盤の安定強化については、文化的側面を適切に確保しつつ、空手の価値を活用した運営資金の確保策を構築する。

(公認段位制度)

- 沖縄空手における技量等を確認するための客観的指標となる新たな段位制度については、各流会派や道場等が独自に段位を発行している現状を尊重しつつ、空手関係団体等と密接に意見交換を行いながら検討する。

(ユネスコ無形文化遺産への登録等)

- 県指定無形文化財「沖縄の空手・古武術」の保持者は、2018年2月末現在5名となっている。同保存会の事務局体制の安定強化を図り、継続的な保存継承活動を行うためにも、定期的に保持者の追加認定を行う必要がある。
- 「沖縄の空手・古武術」は県指定無形文化財として、その価値は認められており、県の21世紀ビジョンにおいても保存・継承等に取り組むこととしている。沖縄空手の価値を広く県民に啓発し、ユネスコ無形文化遺産の登録に向けた気運の醸成を図る。

(学術研究・体制)

- 沖縄空手会館の展示施設において、収集した資料の分析を行い、研究成果の発表や企画展を適宜開催するとともに、空手の専門学科を設置している高等教育機関等と連携して研究内容を深める。

(2) 【普及・啓発】

空手を取り巻く環境変化を的確に捉えた施策の推進により世界の空手家が「空手発祥の地・沖縄」を認識している。

ア めざすべき将来像

(空手発祥の地・沖縄)

- 空手愛好家をはじめとする世界中の人々が「空手発祥の地・沖縄」を認識している。
- 老若男女問わず世界中が沖縄を発祥の地とする空手で交流を深めている。
- 沖縄空手に特化した「沖縄空手大使」を設置し、国内外で普及活動等を行うことにより世界と沖縄をつなげている。
- 世界中に沖縄と縁のある空手の組織（支部）を作り、情報交換や交流、沖縄で大会等を開催する際には当該組織を通して周知を図るなど、世界と沖縄とのネットワークが構築されている。
- 沖縄が空手演武におけるギネス記録を更新し続け、遂には全ての県民による世界記録が樹立されている。
- 「空手発祥の地・沖縄」で生まれ受け継がれてきた空手が、全国の空手愛好家と心をつなげてユネスコ無形文化遺産の登録に向けた活動を行い、さらなるブランディングが図られている。

(武道教育と空手の活用)

- 県内の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等の運動会、体育祭等で基本動作や簡易な型、普及型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの集団演武が行われている。
- 沖縄県民は学校体育を通じ、生涯スポーツとしての観点から沖縄空手を身につけている。

(競技と伝統)

- 国内、アジア、世界の様々な空手関係団体と連携を図り、沖縄空手会館をはじめとする県内各地で、一年を通して各団体等による大会や演武会、セミナー等、空手に関するイベントが開催されている。

- 沖縄空手国際大会は、国内外の空手愛好家が一度は出場を目指す世界的に権威のある大会となり、定期的に開催されている。
- 競技空手と伝統空手は世界の空手愛好家を牽引する両輪として、明確なビジョンのもと、それぞれの特徴を最大限発揮しながら、必要な協力を行いつつ共に発展している。
- 伝統空手は、生涯武道としてすべての空手愛好家の受け皿となっている。

(競技力の強化)

- 沖縄県出身の空手家がオリンピックの形種目において金メダルを取り続けている。

イ 現状と課題

(空手発祥の地・沖縄)

- 沖縄県が 2016 年に実施した「沖縄伝統空手・古武道実態調査」によると、「空手発祥の地・沖縄」の認知率は、県内の 96 %に対して県外では 34 %と低い状況にあることから、認知率向上に向けた取組を推進する必要がある。
- 「空手発祥の地・沖縄」の国内外への発信等を目的として、国際セミナーや空手の日記念演武祭、指導者派遣事業等を実施するとともに、空手1プレミアリーグを開催してきた。さらなる発信を行うため、沖縄伝統空手道振興会及び関係団体等と連携し、2018 年 8 月の第 1 回沖縄空手国際大会の開催に向けて専門部会を設置し、流派別による型競技やセミナー、交流演武会等にかかる作業を進めている。
- 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、世界空手連盟及び全日本空手道連盟は「空手発祥の地・沖縄」を認識している。今後は、空手関係者に加えて一般の人々にも「空手発祥の地・沖縄」の周知を図る必要がある。

(武道教育と空手の活用)

- 中学校では武道（柔道、剣道、相撲、空手道、なぎなた、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道）が必修化され、県内では 8 割以上の学校が空手を導入している。また、県内の高等学校では選択として約 6 割が空手を導入している。

- 学校現場においては子供達が空手に接する時間は確実に増えてきており、空手に親しむ入り口として普及型Ⅰ、Ⅱを教えている。一方、他都道府県の状況は、柔道や剣道、地域によっては弓道など、他の武道が多い。
- 日本武道協議会では、2017年5月に、柔道、剣道、相撲、空手道、なぎなた、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道の指導書を作成して、全中学校に配布している。国は人格形成に重要との観点から武道を取り入れており、沖縄から空手を発信していくタイミングとして良好な環境にある。
- 2017年3月に、沖縄県教育庁において「沖縄県版 学校体育における空手道指導書」を作成し、県内全ての小中高及び特別支援学校に配布している。また、空手の普及・啓発という面から、当該指導書を広く閲覧できるようダウンロードが可能な形式で教育委員会のホームページに掲載している。

(競技と伝統)

- 競技空手と伝統空手は、世界空手連盟及び全日本空手道連盟が主催する大会等への参加資格の有無はあるが、練習している空手家にとって違いはない。
- 競技と伝統を分けてとらえることもあるが、沖縄の先人が創り上げた空手が現在まで伝わり、その流れと継承されたものを大切に発展させていくことが伝統空手の使命である。
- 空手は元々は一つであったが、時代とともに変化し競技と伝統に分かれている。これは時代の流れであり対立すべき問題ではない。
- 沖縄空手案内センターは、国内外に向けて日・英・仏等の多言語による空手関連の情報発信を行うほか、伝統空手の稽古を希望する全ての空手愛好家と各道場をつなぐコーディネートを実施している。

(競技力の強化)

- 沖縄を発祥の地とする空手が2020年東京オリンピックの正式種目として採用され、形競技において沖縄県出身の空手家が金メダルを目指し鍛錬を続けている。平和の武である空手が平和の祭典であるオリンピックで初めて披露される時、沖縄県出身の空手家が最高のステージに立つことを県民は期待している。

ウ 推進戦略

(空手発祥の地・沖縄)

- 「空手発祥の地・沖縄」を国内外の空手関係団体等と連携し発信する。
- 世界各地において、県内各流会派とのネットワークを構築し活動している道場等を架け橋として、各国に沖縄空手の支部を設立し、世界と沖縄との連携強化を図る。
- 世界と沖縄をつなぐパイプ役として「沖縄空手大使」を設置し、各国において普及活動の展開を図る。
- 2016年10月に「空手の日記念演武祭」において達成した空手演武による3,973人のギネス世界記録の更新については、「世界のウチナーンチュ大会」との連携を視野に取り組む。
- 厳しい鍛錬を通して驚異的な突き蹴り等の威力や素早い轉身などの身体操作を身につけ、または、世界大会等で優秀な成績を収めた、世界の空手愛好家の憧れとなっている沖縄出身の空手家をメインにして、国内外で沖縄空手を披露するとともに、県内各地でセミナー等を実施する。
- 国内外で開催される物産展や旅行博などのイベント会場において、沖縄の美しい自然や琉球音楽、食文化など多様で豊かな文化資源と連携し空手の演武を披露することにより、総合的に沖縄の魅力を伝え「空手発祥の地・沖縄」の周知を図る。

(武道教育と空手の活用)

- 教育関係機関と連携し、県内の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等の運動会、体育祭等において、受け・突き・蹴り等の基本動作や簡易な型、普及型Ⅰ、Ⅱ、Ⅲなどの集団演武を行う。
- 幼児向けの型を新たに創作し空手に親しみやすくする。
- 子どもが憧れる沖縄空手のヒーローキャラクターや幼児が関心を示す空手を題材とした絵本等を制作し、子どもたちの空手への関心を高め学びたいとなる環境を醸成する。
- 大会等に参加するため来訪した海外の空手愛好家と子どもたちが交流する場を創出し、子どもたちの異文化を理解しようとする姿勢や海外への関心を高めることにより、国際的視野を養う一助となるよう取り組む。

- 身体的な強さや武術の向上を追求するだけでなく、空手愛好家の裾野の拡大に向けて、沖縄空手が有している護身的要素や精神面の養成などの本質は変えずに、女性の関心の高い美と健康を目的とする空手エクササイズの普及など、空手の新たな魅力を発信する。

(競技と伝統)

- 国内外の空手関係団体と連携を図り、世界各地で実施されている空手の大会やセミナー等の県内開催に向けた誘致活動を展開する。また、参加者に沖縄で生まれ受け継がれてきた型と基本的な運用法、独特な鍛錬法及び平和の武である精神性を伝える仕組みを構築する。
- 沖縄空手国際大会を定期的で開催し世界でも権威のある大会とするために、2018年8月の第1回大会の開催に向けて設置した審判部会や競技部会の機能を継続させる仕組みを構築するとともに、流派連絡会を設置し技術講習会を行うなどして、沖縄空手界全体の技術力の向上を図る。
- 生涯武道を志す全ての空手愛好家と各道場をつなぐ沖縄空手案内センターの機能を強化する。また、受け皿となる道場の運営基盤の強化を図る。

(競技力の強化)

- オリンピックを含めた各種の世界大会等で優秀な成績を目指し日々鍛錬している沖縄出身の空手家について必要な支援策を検討する。

(3) 【振興・発展】

空手家が豊かな人生を歩む「空手の聖地・沖縄」が確立されて空手による産業振興が図られている。

ア めざすべき将来像

(振興・発展の全体像)

- 沖縄は、空手に関する夢が叶い、空手家が豊かな人生を歩む「空手の聖地」となっている。
- 空手を活用した収入手段や関連産業が多様化し、門下生から始まり、道場手伝い・ボランティア、兼業、関連企業への就職、安心して暮らせる専門など、「空手に関する生業のロールモデル（模範的な生活設計）」が構築されている。
- 子どもから高齢者まで、全ての人を対象とした教材や映画などの各種コンテンツが充実し、これらの活用により空手の精神性が深く理解されている。
- 空手家は、県民をはじめとする世界中の人々から尊敬され「空手レジェンド（偉大な人物）」と称賛されている。
- 空手の振興・発展を図るため、沖縄において、国内外の関係団体と連携した強力な組織体制が構築され、企画・運営・管理・改善がなされている。

(人づくり)

- 産官学連携のもと、企画調整を担う事務局体制が構築され、空手を活用した体育・徳育・食育・知育による人づくりの方法が科学的に体系化されている。(①体育－身体鍛錬、競技スポーツ、②徳育－精神修養、③食育－栄養摂取、沖縄食材の効用、④知育－体の仕組みから自然・人文・社会の学習教材展開等)
- 門下生や観光客等を「客」として捉えた個々のマーケティング戦略が構築され、産学と連携した歴史、文化、スポーツ科学、健康、コンテンツ等の各種研究・試験、実用化検証及び普及体制が確立されている。
- 空手が、琉球音楽や琉球舞踊などの個性豊かで多様性のある文化資源と連携し、高度なエンターテインメントとして公演されている。

(情報通信の活用)

- 沖縄空手会館を拠点に、空手に関連する情報がインターネット上で多言語化され、世界中の人々が「いつでも、どこでも、だれでも」アクセスし把握できる仕組みが構築されている。
- 各道場や指導者等の閲覧、稽古または見学の予約が行えるとともに、書籍、映像資料、道着、空手関連のゲームや音楽等が閲覧、購入できる仕組みが構築されている。
- インターネットを經由して、修行年数及び鍛錬の度合に応じた道場探しや、会員資格等の登録手続、指導者として認定される特定の段以上を沖縄で受験する場合の手続等が可能となっている。
- 沖縄空手案内センター等が中心となって、インターネットを活用した国内外の空手愛好家の受入体制が構築され来訪者が増加している。

(産業振興)

- 観光商品として、空手のルーツを辿るコースや、沖縄空手会館での演武披露、空手を体験できるプログラム、オリジナル商品等を企画・開発することより、空手愛好家のみならず空手を目的とした交流人口の拡大と、消費額の増加により幅広い産業への経済波及効果が高まっている。
- 道場の運営及び整備に関する計画策定等の支援体制や、ライセンスビジネス（財産の整理・企画、各種商標取得・管理・運営、情報受発信体制）の確立と、その活用を図ることにより、空手関係団体の運営基盤が強化され、県内の各道場を支援する仕組みが構築されている。
- 資金融通システムにおいて、空手を中心とした仮想通貨による空手経済圏が構築され、クラウドファンディング(電子資金調達)などの多様な金融支援策が充実している。
- 空手を生業とする空手家のライフステージに合わせた、奨学金制度の創設や道場開設資金、運転資金及び事業拡大等に伴い必要となる資金の融資メニューが開発されている。

イ 現状と課題

(全体的な現状と課題)

- 沖縄においては、古くから空手を金銭の対価としてはならないとの教えがあり、このため、空手の価値が経済的に確立されておらず、多くの空手家にとって生業とする場合のモデル的な人生設計が立てにくい状況にある。
- 子どもから高齢者まで全ての人を対象とした、空手の文化的価値や平和の武とされる精神性を理解するための、映像等のコンテンツや伝える仕組みが弱く、空手家への尊敬の念が醸成されていない。
- 県内においては、産官学連携のもと空手の振興・発展のために必要な国内外の空手関係団体とのネットワークを築いた、沖縄空手界を網羅する組織体制が整えられていない。

(人づくり)

- 県内においては、空手をテーマとした研究が継続的に行われていない状況にある。このため、産官学連携のもと空手の稽古による身体的発育や人格形成への効果、人間力を高める効能などに関して総合的に研究し、空手を活用した人づくりの方法について科学的に確立する必要がある。
- 空手を軸としたマーケティング戦略を構築し、産学と連携した歴史、研修、スポーツ科学、健康、コンテンツ等の各種研究・試験、実用化検証、普及体制を確立する必要がある。
- 沖縄空手案内センター等において、空手を活用したエンターテインメント作品の制作に取り組んでおり、定期公演に向けて人材の確保や作品内容の向上を図る必要がある。

(情報通信の活用)

- 沖縄空手案内センターでは、インターネットを活用して日・英・仏・西などの多言語による空手関連の情報発信や、県内での稽古を希望する国内外の空手愛好家を道場へつなぐコーディネートを行っているが、事務局体制の制約から全ての要望に応えられない状況にある。
- 沖縄空手会館の展示施設内にショップを開設し、空手関連グッズ等の販売を行っている。今後は、インターネット上において商品の紹介や販売を検討す

る必要がある。

- 世界中の空手愛好家の修行履歴や稽古内容、昇級昇段試験の時期等を管理し、沖縄への来訪意欲を醸成するコンテンツとして、沖縄空手界全体を網羅する沖縄空手専用アプリの開発を検討する。

(産業振興)

- 空手に関連する顕彰碑ツアーの取組は行われているが、関心のある空手愛好家を対象とした範囲にとどまっており、ガイドの育成を含めて一般的な商品化にはつながっていない。
- 空手の修行を目的として海外から来訪する空手愛好家が、利用しやすい長期滞在型の宿泊施設を整備する必要がある。また、道場探しの手間を省き来訪意欲を促進する観点から、県内道場での稽古を組み込んだツアー商品を検討する必要がある。
- 沖縄空手会館ではオリジナルの商品に対する要望が強く、「空手発祥の地・沖縄」をイメージした空手会館にしかない商品を開発する必要がある。また、空手体験教室を開催しているが、利用者は低調な状況となっている。
- 空手の全国大会や世界大会では、会場の外で多くの企業が物品販売を行っている。例として、全国少年少女大会には、各都道府県から約 2,000 名、保護者を含めると約 4,000 名参加するが、物品購入は子どものみである。大会の性格を考慮した品揃えと販売方法が必要である。
- 空手関係団体及び道場の運営基盤の強化を図るための、ライセンスビジネスやクラウドファンディングの構築、空手家向けの金融商品の開発については、専門家を交えた会議を設置し、運営団体や資金供給方法等について検討する必要がある。

ウ 推進戦略

(全体戦略)

- 空手を活用した経済的自立への仕組み作りに向け、自我作古の気概を持って、空手界及び産業間が連携し振興・発展に取り組み「空手の聖地・沖縄」を確立させる。
- 空手家が空手を生業とする場合のロールモデル（模範的な生活設計）の策定

に向けて、ライフステージにあわせた指導・助言・支援等が受けられるモデル事業を検討し実施する。

- 空手の文化的価値や平和の武とされる精神性、空手家による鍛錬の映像等のコンテンツを制作し世界中の人々が視聴できる環境を整えるとともに、長年の鍛錬によって人格を陶冶した空手家の人間的魅力を直接伝える演武会やセミナー、講演会を開催する。
- 人材育成、情報、物、資金等を統括する強力な事務局体制を構築し、同体制による企画・運営・管理・改善を行う。
- 2020年「東京オリンピック」及び「那覇空港第2滑走路供用開始」、2021年「沖縄観光目標1200万人」、2022年「沖縄復帰50周年記念」等の今後の主要日程や、県内の人口の推移と構造変化を見据えながら施策を推進する。

(人づくり)

- 産官学連携のもと空手の稽古による身体的発育や人格形成への効果、人間力を高める効能などに関して総合的に研究し、空手を活用した人づくりの方法について科学的に体系化するとともに、空手を軸としたマーケティング戦略を構築し、歴史、研修、スポーツ科学、健康、コンテンツ等の各種研究・試験、実用化検証、普及体制を確立する。また、空手をテーマとしたエンターテインメント作品を制作し定期的に公演することにより、人材育成の場としても活用する。
- 研究や短期留学等で沖縄に滞在する外国人向けに、カリキュラムとして沖縄の伝統文化である空手に触れる機会を設け、同人の感性を磨くとともに沖縄への理解度を深めることにつなげる。

(情報通信の活用)

- 日々進化する情報通信技術を活用した沖縄空手専用アプリの開発などにより、世界中の空手愛好家が「いつでも、どこでも、だれでも」沖縄空手界にアクセスできる仕組みを構築し、沖縄での稽古を希望する全ての空手愛好家の要望に応えられる環境を整えるとともに、空手関連商品の販売や昇級昇段試験等を管理し来訪意欲を醸成するシステムとしても運用する。

(産業振興)

- 観光業界と連携し、各流派の空手家や縁の地を辿るルーツツーリズム、道場での稽古を希望する空手愛好家用のパッケージ商品、一般の人々や教育旅行向けの演武披露及び体験型商品など、空手を組み込んだ旅行商品を造成するとともに、空手専用ガイドの育成や長期滞在型宿泊施設の整備についても取り組む。また、沖縄空手会館の近隣にある観光施設との連携や、現在整備が進められている新たな施設との連携も視野に入れながら、平和と伝統文化を学び体験する観光地としての拠点形成を図る。
- 指導要領や教本等の作成・販売、研修システムの開発など、免許制度を軸とした沖縄空手の品質管理体制を構築する。
- ライセンスによる権利保護と活用を図るため、次のことに取り組む。
 - ・プロパティ（財産）の整理・企画と管理・運営を行う団体を設立する。
 - ・企業等の出資によるファンドを立ち上げ、商品展開したライセンス料が当該団体に入る仕組みをつくる。
 - ・地域団体商標を取得し手数料が入る仕組みをつくる。
 - ・企業と連携し空手発祥の地を発信できる商品を開発する。
 - ・沖縄空手を保存するための基金を設立する。
- 道場運営の安定化を図るため、適用性を評価しながら、新たな手法としてフランチャイズ方式（経営方式提供型）の導入を検討する。
 - ・フランチャイズ方式は、フランチャイザー（本部）が経営・運営のシステムやノウハウをパッケージ化し、フランチャイジー（加盟道場）に提供するシステムである。
 - ・加盟道場は、必要な人材や資金を投入して道場運営を行うとともに、本部の経営・運営手法等の使用を許諾される対価として、本部に加盟金を支払い、道場運営開始後は使用料（ロイヤリティ）を支払う。
 - ＜本部が提供する内容＞
 - ・人材育成システム（経営者としての教育訓練）
 - ・施設整備支援（道場整備の際、業者の選定を一括して行う。各道場に必要な資材等は共同購入により単価を下げ節約を図る。）
 - ・経営システム支援（電子決済の導入等）
 - ・経営指導等（門下生の募集方法、道場開設の準備支援、広報の活用方法等）

- 空手を中心とした仮想通貨による空手経済圏の構築とクラウドファンディング（電子資金調達）などによる多様な金融支援策を検討する。
- 空手を生業とする空手家のライフステージに合わせた、奨学金制度や道場開設資金、運転資金及び事業拡大等に伴い必要となる資金の相談窓口、経営指導員の設置、融資メニューの開発など金融面からの支援体制を整備する。

4 ビジョンを実現するための体制の構築

本ビジョンの実現に向けては、めざすべき将来像が多岐にわたり、取り組みが膨大な量になることから、空手家、空手関係団体、県、経済界等それぞれが担う役割を明確にしながら、関係機間の密接な連携により必要な施策を推進することが重要となります。

(1) 空手家、空手関係団体、県、経済界等の協働体制

本ビジョンを実現するうえで最も大切なことは、沖縄の誇る伝統文化である空手を保存・継承・発展させるために、それぞれの役割において、何ができるか考え行動することです。

根幹となる保存・継承については、空手家が日々実行している受け継がれてきた型の反復や、巻藁・チーシー・サーシー・カーミー等の伝統的な鍛錬方法に加え、最先端のスポーツ科学に則したトレーニング方法を取り入れ、武術としての技量を高める必要があります。また、型の分解（運用法）や鍛錬を通して得られる精神性の向上も次世代に引き継ぐ必要があります。

2008年2月14日に、「沖縄伝統空手道及び古武道の保存・継承及び世界への普及振興を図ると共に、空手道及び古武道発祥の地・沖縄が世界の空手の聖地となることをめざす」ことを目的として、全沖縄空手道連盟、沖縄県空手道連盟、沖縄空手・古武道連盟、沖縄県空手道連合会の県内空手主要4団体で設立された沖縄伝統空手道振興会は、これまで唯一の統一組織として沖縄空手界を牽引してきました。沖縄空手会館の建設促進、空手の日記念演武祭におけるギネス世界記録の更新などは振興会の主たる成果としてあげられます。

しかしながら、財政基盤の脆弱さと事務局体制の拡充強化が設立時からの課題となっています。また、同振興会の規約に定められた、伝統空手・古武道の各流派連絡会は、設置されていない状況にあります。沖縄を発祥とする空手が世界に広く普及し、193カ国に1億3千万人の空手愛好家がいるといわれている今日において、来訪する国内外の空手愛好家に、しっかりと空手の本場である沖縄の型と精神性を伝えるためには、同連絡会を設置し受け継いできた型や解釈等について流派内で意見交換等を行う必要があります。

「空手発祥の地・沖縄」を世界に轟かせ、「空手の聖地・沖縄」を確立するためには、沖縄伝統空手道振興会の役割は重要です。空手が平和の祭典であるオリンピックの正式種目として採用された今だからこそ、時代の流れを的確に捉えた施策を推進する必要があります。まずはじめに、振興会未加入の道場が多数あることから加入を促す取組を行い、沖縄空手界が一体となって事業が推進できる仕組み作りを行う必要があります。

また、県は、沖縄空手の振興・発展を図るため必要な施策を推進する専任課として、2016年4月に空手振興課を設置しました。沖縄空手会館を拠点として「空手発祥の地・沖縄」を国内外に向けて発信するとともに、世界中の空手愛好家の受入体制の構築に取り組んでいるところです。

経済界等においては、人材育成と自立社会を構築するうえで、早くから空手の価値と有効性を認識し、長期間分裂状態にあった沖縄空手界をまとめるため、現在の統一組織である沖縄伝統空手道振興会の設立に多大なる貢献を果たしました。今後は、沖縄空手の文化的価値のさらなる探求と、「空手発祥の地・沖縄」を取り巻く世界の潮流を的確に見据えながら、文化と産業振興の調和を念頭に、空手を活用した振興・発展を図っていく必要があります。

沖縄を空手の聖地にするためには、空手家、空手関係団体、県、経済界等が協働して、全体の調整を図りながら得意分野において力を発揮し、様々な課題を解決していく必要があります。

(2) 空手関係団体と県の役割

本ビジョンで描いた沖縄空手の3つの将来像の実現に向けて、空手関係団体が優先すべき役割は、空手の真髄である型と精神性を保存し次世代へ継承することです。そのためには、道場の安定的運営と後継者及び指導者の育成に取り組む必要があります。

県は、空手のさらなる学校等への導入や、県指定無形文化財保持者の適切な認定、学術研究体制の構築、ユネスコ無形文化遺産の登録に向けた取組を推進することにより、沖縄空手の文化的価値の向上を図ります。

また、必要な事業を予算化し、空手関係団体と協力して実施することにより「空手発祥の地・沖縄」の普及・啓発を推進するとともに、競技と伝統を両輪として、それぞれの特徴を最大限発揮させながら、ともに発展させる取組を行

い「空手の聖地・沖縄」の確立を目指します。

そのためには、それぞれの組織体制の安定強化が不可欠であることから、沖縄伝統空手道振興会においては、法人格の取得に向けた取組と事務局体制の拡充に向けた検討を行うとともに、県では、空手を活用した産業振興の進展状況等をみながら、組織体制の強化を検討する必要があります。

(3) ビジョン実現に向けたロードマップの策定

めざすべき3つの将来像の実現に向けて推進戦略を効率的かつ確実に進めるため、具体的な工程表となる「沖縄空手振興ビジョンロードマップ（仮称）」を策定します。

5 現状と発展可能性

(1) 平成28年度(2016年度)沖縄伝統空手・古武道実態調査報告書結果

(県内の道場数及び門下生数)

県内の道場数は2016年末現在386となっており、2009年に調査した際の約430に比べ減少しています。また、本調査においては、県内道場の門下生数の調査は行われていませんが、推計値として、道場の平均門下生数31.5人に回答のあった道場数203をかけると、最低でも約6,000人いると推計されます。

(海外から来訪する空手愛好家)

海外に支部を持つ道場は31.5%、外国人を受け入れた道場は37.4%となっています。また、海外から来訪する空手愛好家への平均指導日数は、初回の者へは9日、2回以上の者へは8.9日となっており、沖縄を訪れる一般的な観光客に比べ長期の滞在となっています。

国別の割合で見ると、アメリカが最も多く38.2%、次にオーストラリアで21.1%、続いてフランスの17.1%となっています。

県が2017年10月に策定した沖縄21世紀ビジョン実施計画(後期)においては、沖縄空手の振興施策の効果を図る成果指標として「海外からの空手関係者来訪数」を設定しており、実績として2012年度は800人、2016年度は1,188人となっています。

今後の展望として、2017年3月に沖縄空手会館がオープンし、2018年8月には同会館等を会場として第1回沖縄空手国際大会が開催され、2020年には東京オリンピックにおいて空手が正式種目として披露され「空手発祥の地・沖縄」への注目度が高まることが予想されることなどから、今後とも海外からの空手関係者等の来訪は増加していくものと推測されます。

(2) 沖縄空手会館

沖縄空手会館は、「空手発祥の地・沖縄」を国内外へ発信するとともに、世界中の空手愛好家の受入体制を構築する拠点施設として整備され、2017年3月にオープンしました。

沖縄空手会館の運営は、指定管理者制度を活用し、第1期の管理者として2017年3月4日から2020年3月末までの間、一般財団法人沖縄観光コンベンションビューローが指定されました。2017年末現在における道場施設の平均稼働率をみますと、目標の21%を上回る約28%となっており順調に推移していますが、一方で、資料室の入館者数は目標の3万3千人に対して約1万3千人と厳しい状況となっています。

沖縄空手会館の重要な機能として、沖縄空手の源流と歴史性、そして文化的価値を広く世界に知らしめることがあります。このため、そのきっかけとなる資料室への入館者の増加に向けては今後ますますの努力が求められます。

また、会館内に2017年4月に設置した沖縄空手案内センターでは、演武会やセミナーなど空手に関連する情報発信と、県内での稽古を希望し国内外から来訪する空手愛好家と道場をつなぐコーディネートを行っています。同センターのコーディネート機能の充実が来訪する空手愛好家の増加に直結することから、スタッフを含めた事務局体制の強化に努める必要があります。

沖縄空手会館は、世界中に1億3千万人いるといわれている空手愛好家の受入体制の構築を図りながら、「空手の聖地・沖縄」を代表する施設として、その機能を十分に発揮させる必要があります。

【 資 料 編 】

1	「沖縄空手振興ビジョン」策定の経緯	1
2	沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会委員及び部会委員名簿	2
3	沖縄空手振興ビジョン策定委員会及び各部会組織図	4
4	平成28年度沖縄伝統空手・古武道実態調査報告書（抜粋）	5

1 「沖縄空手振興ビジョン」策定の経緯

【平成29年】

- 7月27日 第1回沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）骨子（案）」の検討、課題整理、部会の設置
- 8月24日 第1回沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会
第1回沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会
- 25日 第1回沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）骨子（案）」の検討
- 9月14日 第2回沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会
19日 第2回沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会
20日 第2回沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）骨子（案）」の検討
- 10月24日 第3回沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会
第3回沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会
第3回沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）骨子（案）」の検討
- 31日 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定シンポジウム（中部地域）
- 11月14日 第2回沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）骨子（案）」の決定
- 12月19日 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定シンポジウム（南部地域）
20日 第4回沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会
第4回沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会
第4回沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）（案）」の検討
- 26日 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定シンポジウム（北部地域）

【平成30年】

- 1月10日 第5回沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会
第5回沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会
- 16日 第5回沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会
・「沖縄空手振興ビジョン（仮称）（案）」の検討
- 20日 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定シンポジウム（宮古地域）
- 21日 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定シンポジウム（八重山地域）
- 30日 第3回沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会
・「沖縄空手振興ビジョン（案）」の決定

2 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会委員及び部会委員名簿

(1) 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会

	氏名	役職等	備考
1	山城 貴子	県文化観光スポーツ部文化スポーツ統括監	委員長
2	佐久川 政信	全沖縄空手道連盟会長	
3	照屋 幸栄	沖縄県空手道連盟会長	
4	阿波根 直信	沖縄空手・古武道連盟会長	
5	島袋 善保	沖縄県空手道連合会会長	
6	喜友名 朝孝	沖縄伝統空手道振興会理事長	
7	大城 信子	沖縄空手道小林流大信館協会会長	
8	知念 賢祐	沖縄伝統空手道小林流ワールド王修会会長	
9	東恩納 盛男	県指定無形文化財保持者(国際沖縄剛柔流空手道連盟最高師範)	
10	佐久本 嗣男	劉衛流龍鳳会会長	
11	宮城 篤正	元県立芸術大学学長	
12	田名 真之	県立博物館・美術館館長	
13	與那嶺 善道	県教育庁教育指導統括監	
14	譜久山 健	(一財)OCVB常務理事兼事務局長	
15	金良 実	(公財)産業振興公社事務局長	
16	玉那覇 靖	県農林水産部農政企画統括監	
17	照屋 義実	県政策参与兼(株)照正組代表取締役	

(2) 各部会委員

① 沖縄空手振興ビジョン（仮称）保存・継承検討部会

	氏名	役職等	備考
1	山川 哲男	県文化観光スポーツ部空手振興課長	
2	下地 誠	県文化観光スポーツ部文化振興課長	
3	伊良波 聰	沖縄空手・古武道連盟理事長	
4	池宮城 政明	沖縄伝統空手道振興会事務局長	
5	大城 信子	沖縄空手道小林流大信館協会会長	
6	伊波 光忠	琉球古武道琉棍会守道館総本部館長	
7	清水 由佳	清水那覇龍鳳館	
8	仲本 雄一	剛柔流仲本塾塾長	
9	宮城 篤正	元県立芸術大学学長	部会長
10	嘉手苺 徹	琉球大学・沖縄大学非常勤講師	
11	萩尾 俊章	県教育庁文化財課長	

② 沖縄空手振興ビジョン（仮称）普及・啓発検討部会

	氏名	役職等	備考
1	山川 哲男	県文化観光スポーツ部空手振興課長	
2	瑞慶覧 康博	県文化観光スポーツ部スポーツ振興課長	
3	上里 一雄	沖縄県空手道連合会理事長	
4	池宮城 政明	沖縄伝統空手道振興会事務局長	
5	八木 明人	国際明武館剛柔流空手道連盟総本部会長	
6	国吉 洋一郎	上地流	
7	比嘉 康雄	小林流	
8	佐久本 嗣男	劉衛流龍鳳会会長	部会長
9	亀川 爵	沖縄の空手・古武術保存会相談役	
10	平良 朝治	県教育庁保健体育課長	
11	ジェームス・パンキュービッチ	チャレンジ沖縄合同会社代表	

③沖縄空手振興ビジョン（仮称）振興・発展検討部会

	氏名	役職等	備考
1	山川 哲男	県文化観光スポーツ部空手振興課長	
2	新城 清秀	沖縄県空手道連盟理事長	
3	池宮城 政明	沖縄伝統空手道振興会事務局長	
4	上間 建	沖縄小林流空手道協会守武館副館長	
5	豊川 明佳	沖縄大学講師	
6	翁長 由佳	(一財)OCVB企画部長	
7	當山 智士	県ホテル協会会長	
8	大村 和久	(公財)産業振興公社経営支援部長	
9	中曽根 健三	(株)守礼堂代表取締役会長	
10	畠中 昭昇	(株)南西産業代表取締役社長	
11	玉那覇 靖	県農林水産部農政企画統括監	部会長
12	井出 將周	(株)チャンプ代表取締役	
13	ミゲール・ダ・ルーズ	月刊「沖縄空手通信」編集人	
14	當銘 辰夫	豊見城市経済建設部長	

3 沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会及び各部会組織図

沖縄空手振興ビジョン（仮称）策定委員会

【委員】17名

- ①行政関係者（沖縄県文化観光スポーツ部 文化スポーツ統括監）
- ②空手関係者（全沖縄空手道連盟会長）
- ③空手関係者（沖縄県空手道連盟会長）
- ④空手関係者（沖縄空手・古武道連盟会長）
- ⑤空手関係者（沖縄県空手道連合会会長）
- ⑥空手関係者（沖縄伝統空手道振興会理事長）
- ⑦空手関係者（道場経営者）
- ⑧空手関係者（道場経営者）
- ⑨空手関係者（保存会）
- ⑩空手関係者
- ⑪学識経験者
- ⑫学識経験者
- ⑬文化財及び教育関係者（沖縄県教育庁教育指導統括監）
- ⑭観光業関係者（（一財）OCVB常務理事）
- ⑮商工業関係者（（公財）産業振興公社事務局長）
- ⑯他産業連携関係者（沖縄県農林水産部農政企画統括監）
- ⑰県内有識者

各部会

沖縄空手振興ビジョン（仮称）
保存・継承
検討部会

沖縄空手振興ビジョン（仮称）
普及・啓発
検討部会

沖縄空手振興ビジョン（仮称）
振興・発展
検討部会

【委員】11名

- ①行政関係者（県空手振興課長）
- ②行政関係者（県文化振興課長）
- ③空手関係者（沖縄空手・古武道連盟理事長）
- ④空手関係者（沖縄伝統空手道振興会事務局長）
- ⑤空手関係者（道場経営者）
- ⑥空手関係者（次世代空手家）
- ⑦空手関係者（次世代空手家）
- ⑧空手関係者（次世代空手家）
- ⑨学識経験者
- ⑩学識経験者
- ⑪文化財関係者（教育庁文化財課長）

【委員】11名

- ①行政関係者（県空手振興課長）
- ②行政関係者（県スポーツ振興課長）
- ③空手関係者（沖縄県空手道連合会理事長）
- ④空手関係者（沖縄伝統空手道振興会事務局長）
- ⑤空手関係者（次世代空手家）
- ⑥空手関係者（次世代空手家）
- ⑦空手関係者（次世代空手家）
- ⑧空手関係者
- ⑨空手関係者
- ⑩教育関係者（教育庁保健体育課長）
- ⑪県内有識者

【委員】14名

- ①行政関係者（県空手振興課長）
- ②空手関係者（沖縄県空手道連盟理事長）
- ③空手関係者（沖縄伝統空手道振興会事務局長）
- ④空手関係者（次世代空手家）
- ⑤学識経験者
- ⑥観光業関係者（OCVB）
- ⑦観光業関係者（ホテル協会）
- ⑧商工業関係者（産業振興公社）
- ⑨商工業関係者
- ⑩商工業関係者
- ⑪他産業連携関係者
- ⑫県外有識者
- ⑬県内有識者
- ⑭地元自治体

4 平成28年度沖縄伝統空手・古武道実態調査報告書（抜粋）

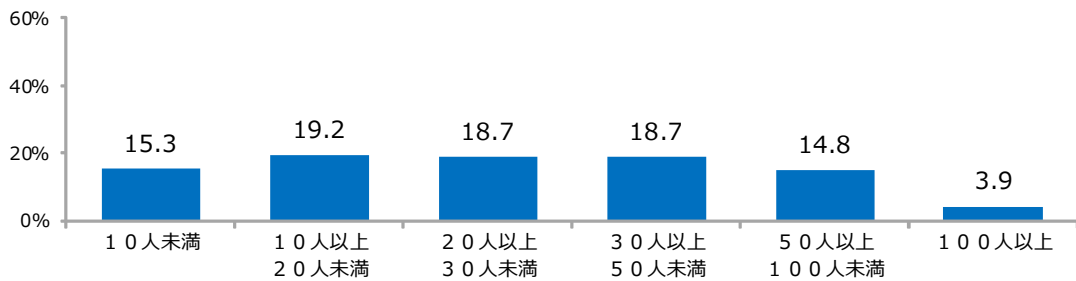
門下生人数

- 門下生の人数は平均すると31.5人。50人以上の門下生を抱える道場も2割弱を占める。
- 男女別でみると、男性は平均22.9人、女性は9.9人。

【合計】

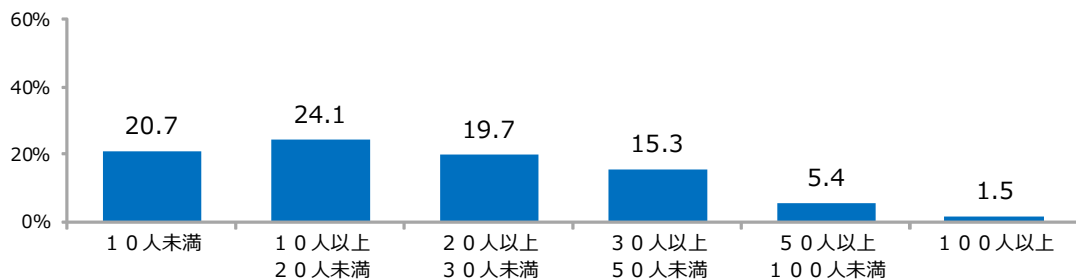
平均：31.5人

注：合計数と男女人数平均合計は、回答記入により差異があります。



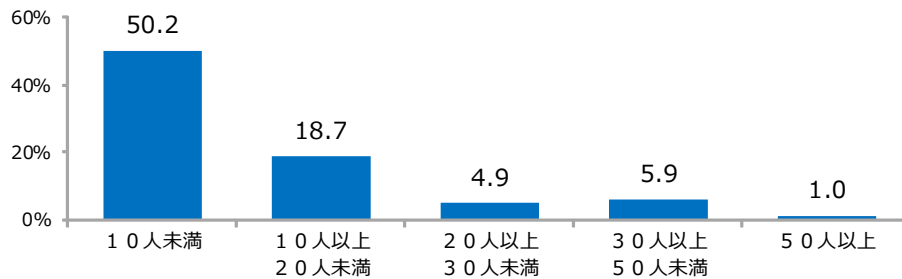
【男性】

平均：22.9人



【女性】

平均：9.9人



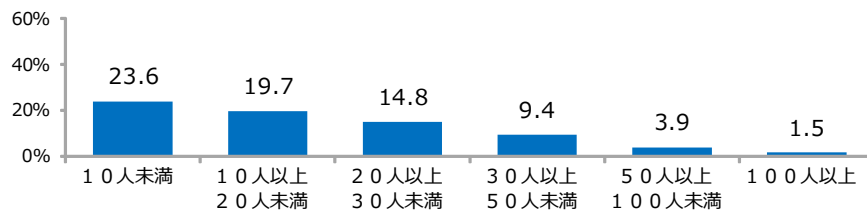
【基数：対象者全員(N=203)】

門下生の年齢層

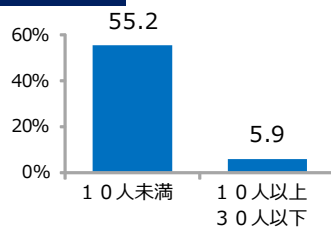
注：前頁の合計平均数と下記平均合計は、回答記入により差異があります。

- 門下生の年齢構成をみると、「小学生以下」が平均19.4人と最も多い。これに「一般（59歳以下）」が平均9.0人で続く。
- 「一般（60歳以上）」のシニア層についても平均4.8人と、「中学生」「高校生」より多い。

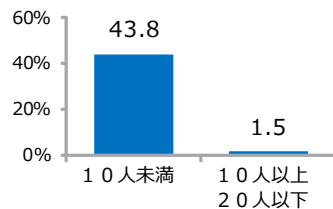
【小学生以下】 平均：19.4人



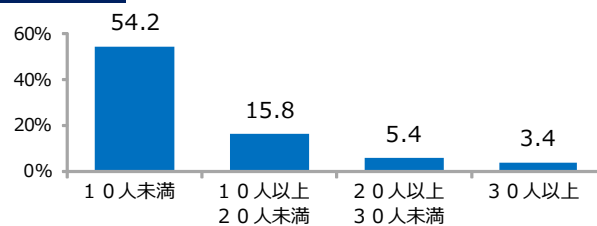
【中学生】 平均：3.8人



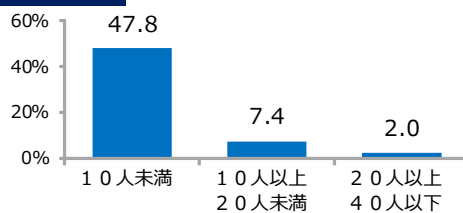
【高校生】 平均：2.5人



【一般（59歳以下）】 平均：9.0人



【一般（60歳以上）】 平均：4.8人

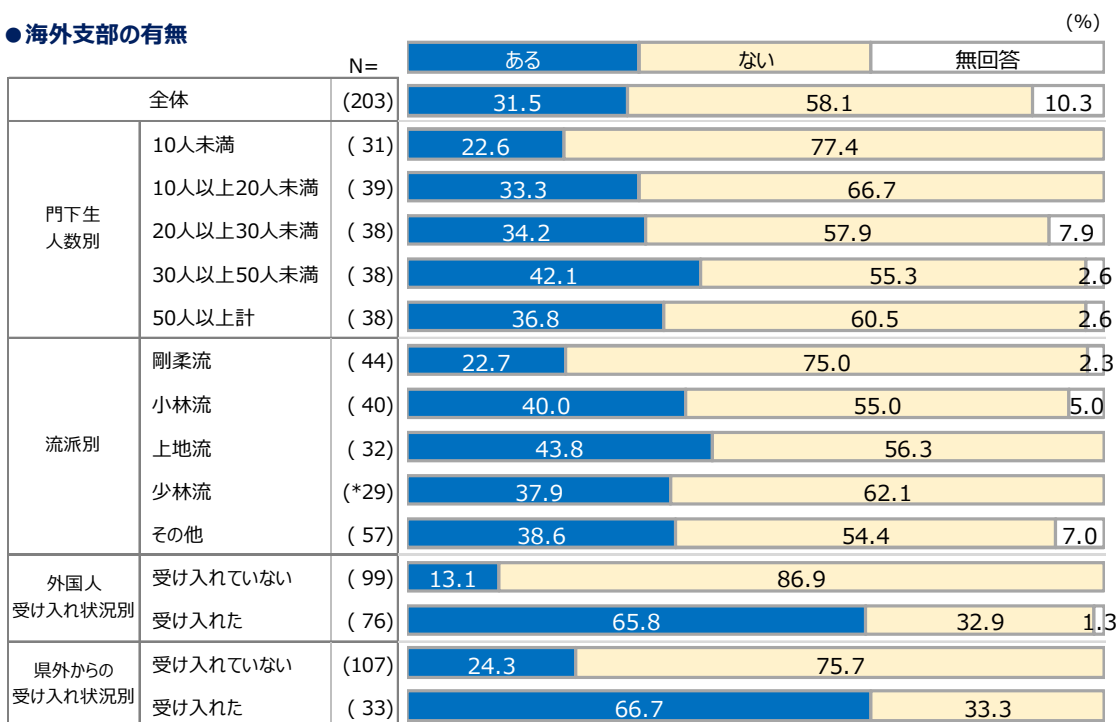


【基数：対象者全員(N=203)】

海外支部の有無

- 海外支部があるのは全体の1/3程度。門下生の人数が「30～50人未満」の道場で42%と最も高い。また、外国人を受け入れている道場の66%が海外支部を持っている。
- 道場数は平均10.5ヶ所、門下生人数は87.7人。支部のある国は「アメリカ合衆国」が64%で最多、次いで「オーストラリア」（27%）、「アルゼンチン」（19%）の順。

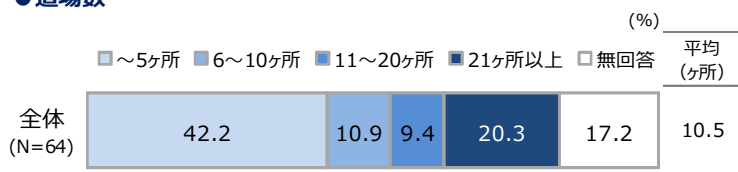
●海外支部の有無



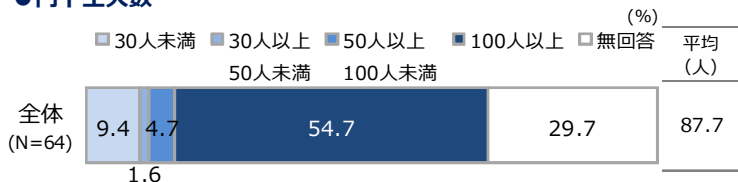
(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

●道場数



●門下生人数



●海外支部がある代表的な国名 TOP10

1. アメリカ合衆国	64.1 (%)
2. オーストラリア	26.6
3. アルゼンチン	18.8
4. インド	17.2
カナダ	17.2
ドイツ	17.2
7. ロシア	10.9
8. フランス	7.8
9. イギリス	6.3
10. イタリア	4.7
スイス	4.7

【基数：海外支部あり(N=64)】

外国人受け入れ状況

- 外国人の受け入れ率は37%。門下生人数が30人以上の道場で5割を超えて高い。また、「小林流」や「上地流」は他流派に比べ受け入れ率が高め。
- 来訪者の出身国はビギナー・リピーターとも「アメリカ合衆国」がトップ。次いで「オーストラリア」「フランス」の順。

外国人受け入れ状況 (%)

		N=	受け入れた	受け入れていない	無回答
全体		(203)	37.4	48.8	13.8
門下生 人数別	10人未満	(31)	19.4	74.2	6.5
	10人以上20人未満	(39)	35.9	59.0	5.1
	20人以上30人未満	(38)	34.2	57.9	7.9
	30人以上50人未満	(38)	55.3	36.8	7.9
	50人以上計	(38)	55.3	39.5	5.3
流派別	剛柔流	(44)	31.8	61.4	6.8
	小林流	(40)	45.0	47.5	7.5
	上地流	(32)	50.0	43.8	6.3
	少林流	(*29)	27.6	69.0	3.4
	その他	(57)	47.4	42.1	10.5
県外からの 受け入れ状況別	受け入れていない	(107)	25.2	73.8	0.9
	受け入れた	(33)	90.9		9.1

(*)基数が少ないため参考値 【基数：対象者全員】

年間延べ人数 (%)

	5人未満	5人以上10人未満	10人以上20人未満	20人以上30人未満	30人以上50人未満	50人以上	無回答	平均 (回)
初回	18.4	11.8	25.0	10.5	21.1	11.8	1.3	21.8
リピーター	14.5	6.6	17.1	6.6	9.2	14.5	31.6	27.7

●最短指導日数 (平均日数)

初回	3.6日
リピーター	4.3日

●最長指導日数 (平均日数)

初回	20.6日
リピーター	20.5日

●平均指導日数 (平均日数)

初回	9.0日
リピーター	8.9日

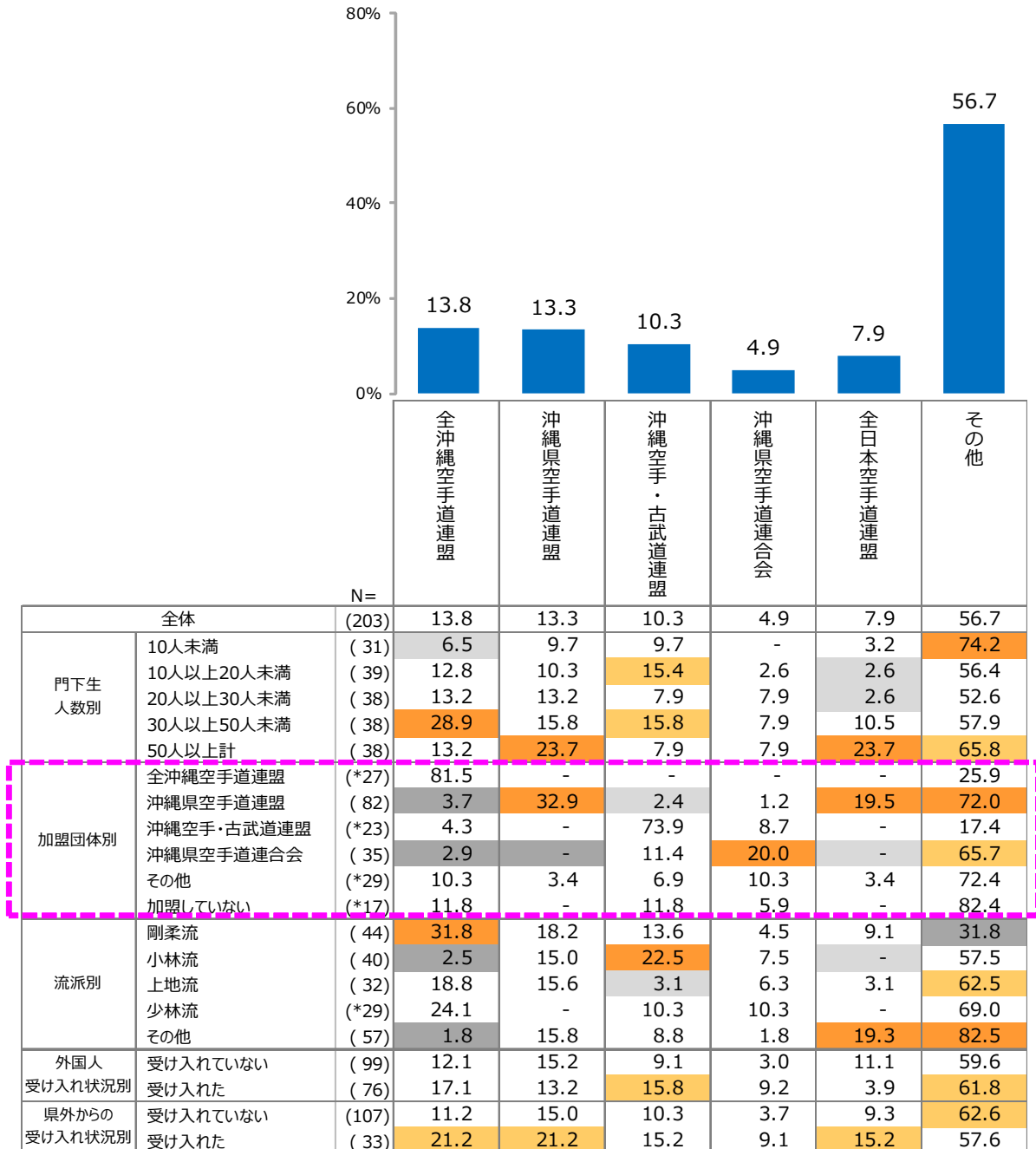
●来訪者の代表的国名

初回		リピーター	
1. アメリカ合衆国	57.9	1. アメリカ合衆国	38.2 (%)
2. オーストラリア	25.0	2. オーストラリア	21.1
3. フランス	21.1	3. フランス	17.1
4. ドイツ	19.7	4. カナダ	10.5
5. カナダ	17.1	5. アルゼンチン	7.9
6. アルゼンチン	11.8	イギリス	7.9
7. インド	10.5	インド	7.9
8. イギリス	7.9	ドイツ	7.9
ロシア	7.9	9. ロシア	5.3
10. イタリア	5.3	10. ブラジル	3.9

【基数：受け入れあり(N=76)】

段位制度 ～称号段位発行者

- ・ 称号段位発行者は「その他」が57%と6割近くにのぼり、所属団体によってその傾向が大きく異なる。



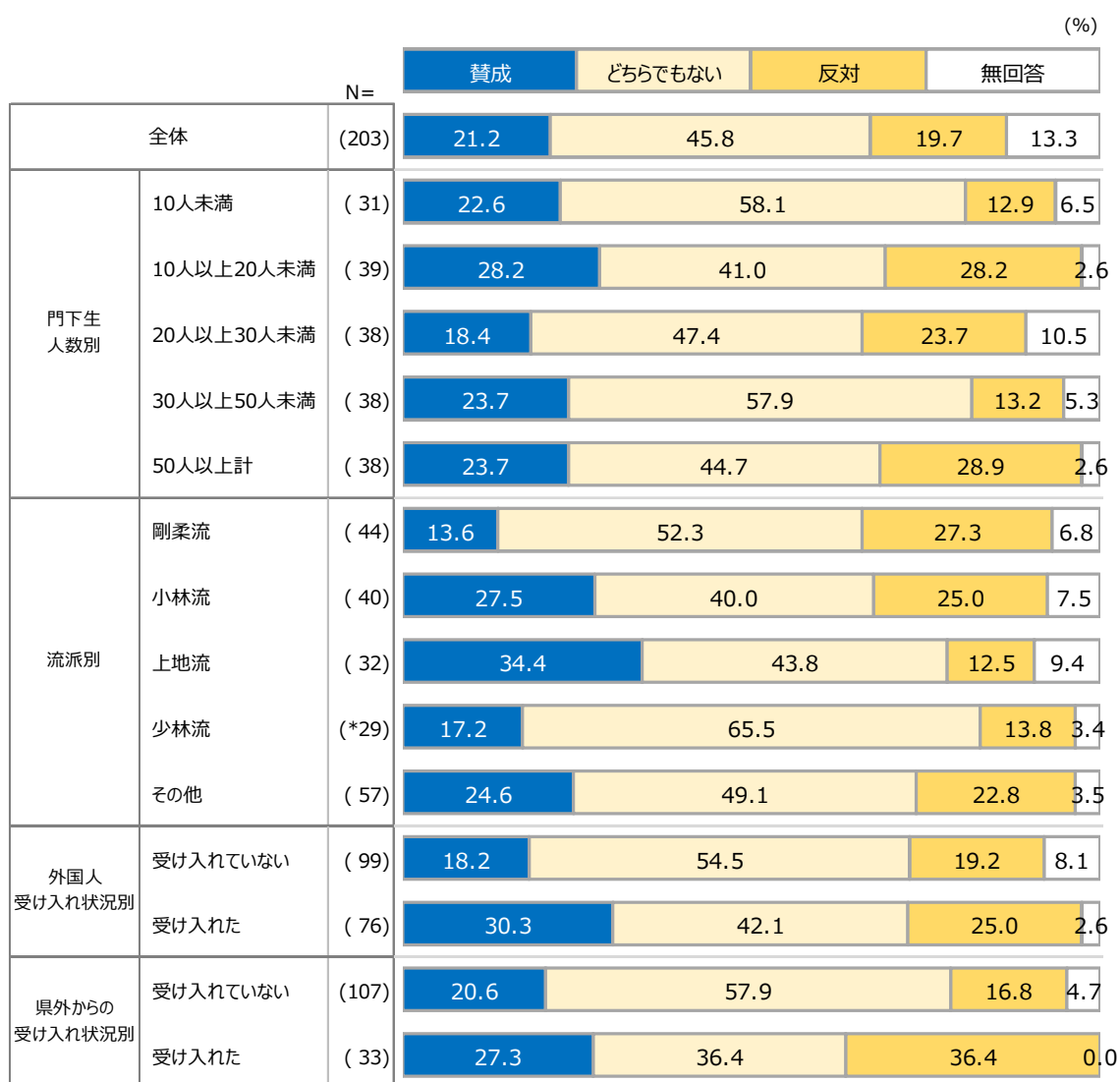
(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

※「全体」と比べて +10 pt以上 +5 pt以上 -10 pt以下 -5 pt以下 (n=30未満は除く)

段位制度 ～「統一称号段位制度」についての賛否

- 「統一称号段位制度」について「賛成」21%、「反対」20%と拮抗しているものの、半数近くが態度を保留としている。
- 流派別にみると、上地流で「賛成」が34%と高い。一方、剛柔派では「反対」が27%と「賛成」を上回っている。



(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

段位制度 ～称号段位の認定書発行有無

- 称号段位の認定書を発行しているのは全体の37%で、発行していないが44%とやや多い。
- 年間での発行実績は20.1件。理由としては「稽古の成果」や「モチベーション向上」など。

● 称号段位認定書発行有無

			N=			(%)		
			発行している	発行していない	無回答			
全体		(203)	36.5	44.3	19.2			
門下生 人数別	10人未満	(31)	38.7	54.8	6.5			
	10人以上20人未満	(39)	38.5	46.2	15.4			
	20人以上30人未満	(38)	28.9	44.7	26.3			
	30人以上50人未満	(38)	52.6	44.7	2.6			
	50人以上計	(38)	39.5	50.0	10.5			
流派別	剛柔流	(44)	29.5	54.5	15.9			
	小林流	(40)	30.0	55.0	15.0			
	上地流	(32)	43.8	50.0	6.3			
	少林流	(*29)	48.3	34.5	17.2			
	その他	(57)	54.4	36.8	8.8			
外国人 受け入れ状況別	受け入れていない	(99)	29.3	57.6	13.1			
	受け入れた	(76)	56.6	35.5	7.9			
県外からの 受け入れ状況別	受け入れていない	(107)	36.4	56.1	7.5			
	受け入れた	(33)	54.5	39.4	6.1			

(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

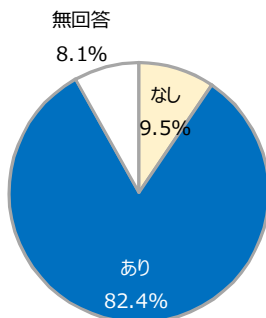
● 年間発行実績



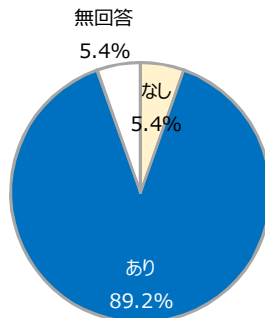
● 認定書を発行する理由 (*抜粋)

- ✓ 技能向上状況の確認
- ✓ 稽古の成果を認めるため
- ✓ 段位ふさわしい技をもっているから
- ✓ 入会～段取得するたびに、年月日及び年齢等を把握するために
- ✓ 小、中学生級位のみ発行
- ✓ 伝統空手の維持
- ✓ 海外支部の要請がある（連盟規定に準ずる）
- ✓ 学校等の推薦書のため
- ✓ 技術の向上の励みになる
- ✓ 門下生のモチベーション維持

● 称号段位審査規定の有無（明文）



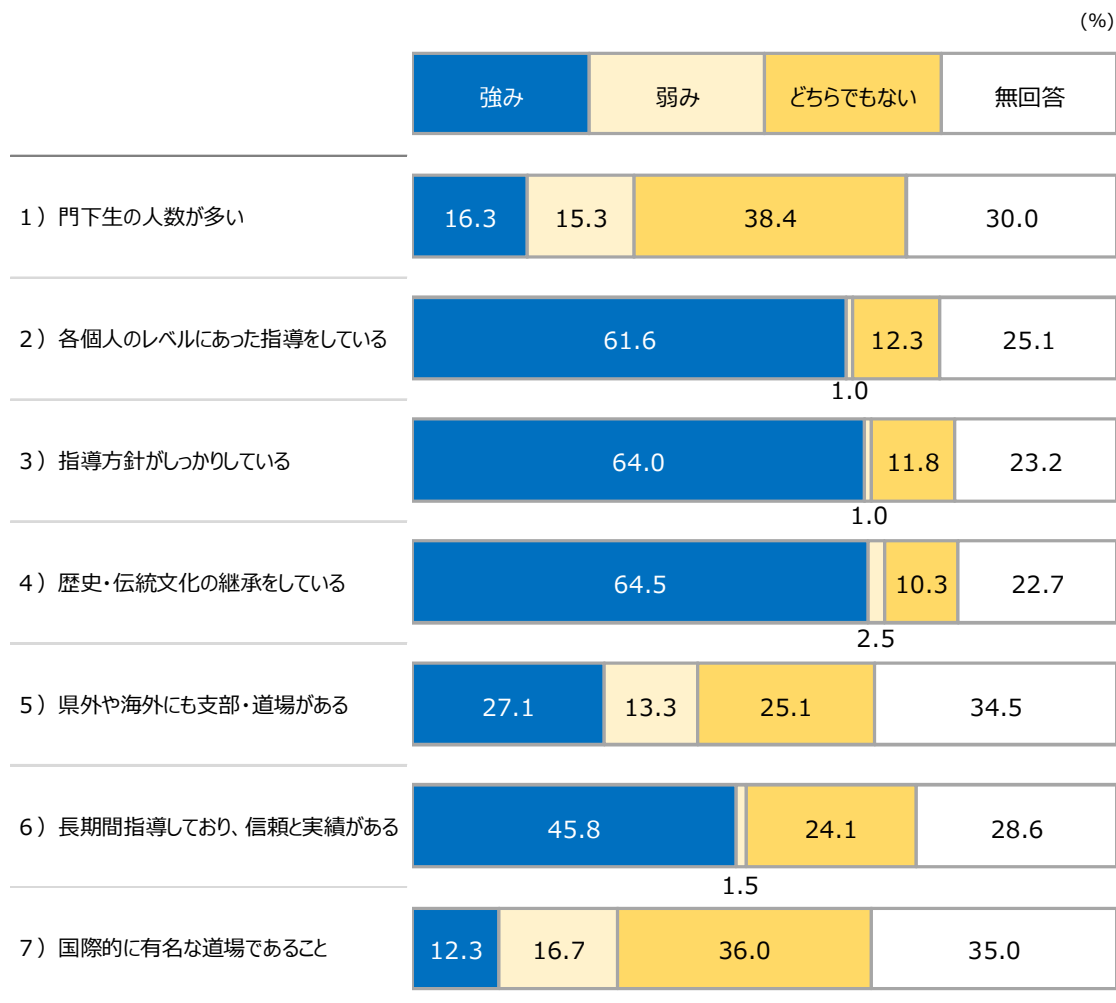
● 審査料・登録料の有無



【基数：発行している(N=74)】

道場の課題（強みと弱み）

- 自身の道場について“強み”と感じていることは、「各個人のレベルにあった指導をしている」（62%）、「指導方針がしっかりしている」（64%）、「歴史・伝統文化の継承をしている」（65%）など。



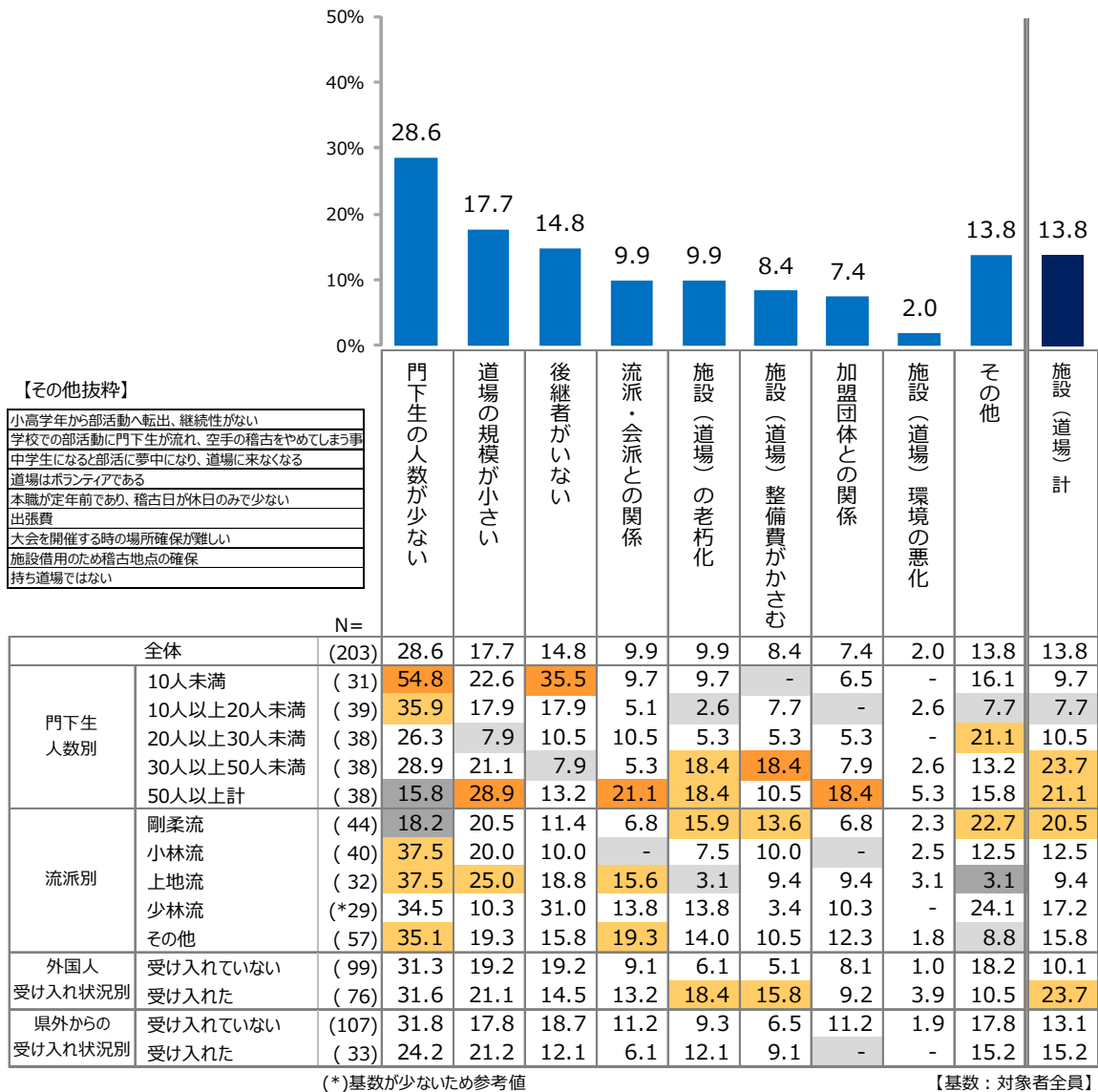
【基数：対象者全員 (N=203)】

【その他抜粋】

指導者においては日本体育協会の上級コーチ資格等を取得している。幅広いライセンス取得者が多い
沖縄手（ティー）の研究
空手道+科学（教員免許有）+医学（独学）
空手と古武術を併習できる
系統の小林館協会傘下道場は県外・国外にもある
子育て、人格形成、地元（活動）密着
古武道、舞踏やエイサーも教えている
少林流本部道場、島袋永三会長は国際的に有名である
門下生の人数が少ない
道場開設以来、ボランティア指導と道場開放
中国武術や合気道の見解がある
初代会長から伝えられた型・理念を忠実に守っている

道場経営の課題

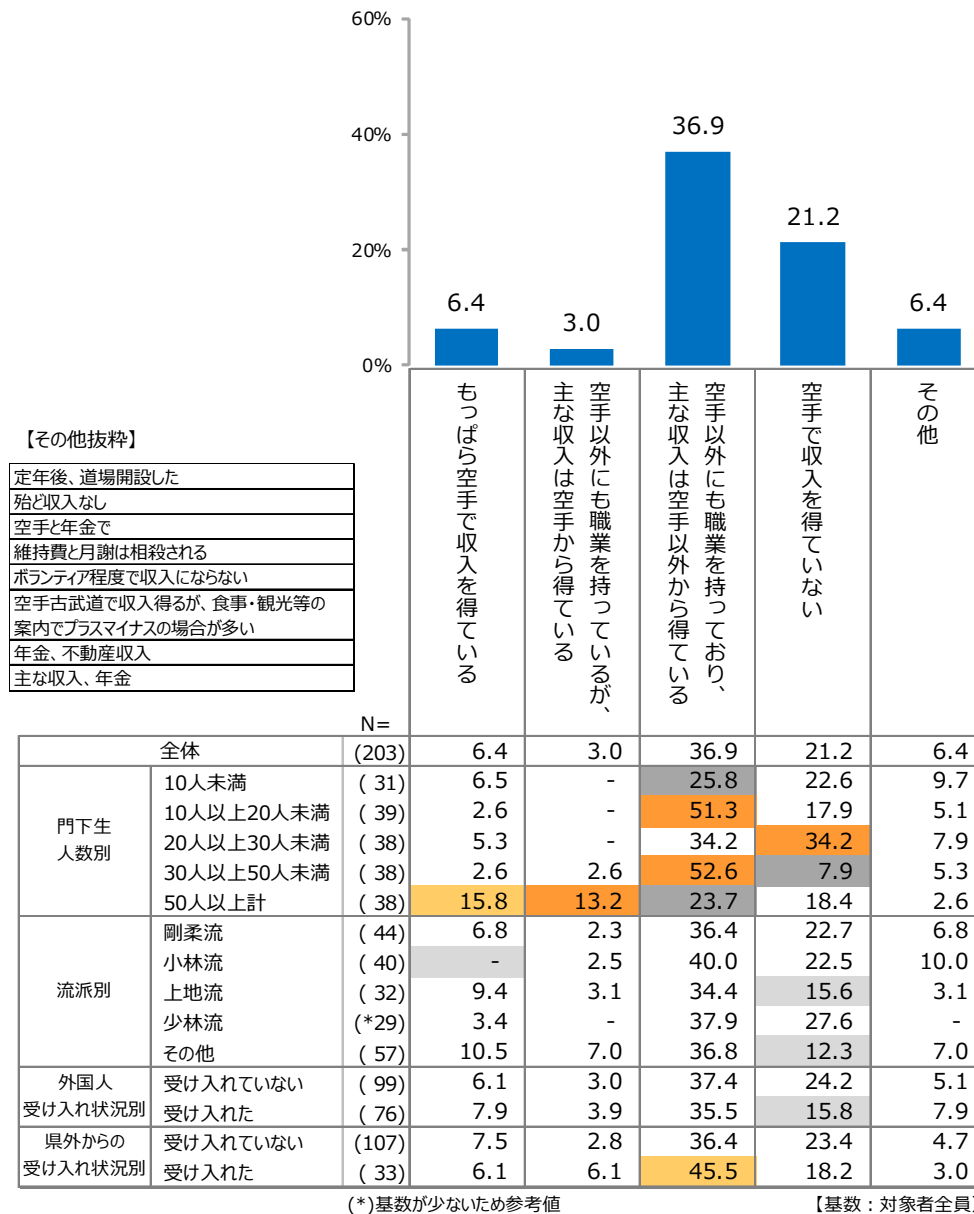
- 道場経営の課題は、「門下生の人数が少ない」（29%）、「道場の規模が小さい」（18%）、「後継者がいない」（15%）。
- 小規模経営（門下生10人未満）の道場では「後継者がいない」ことが36%と高く、また50人以上の道場では「流派・会派との関係」（21%）や「加盟団体との関係」（18%）が課題となっている。



※「全体」と比べて + 10 pt以上 + 5 pt以上 - 10 pt以下 - 5 pt以下 (n=30未満は除く)

空手と収入の関係性

- 主な収入源が「空手」なのは、全体の1割未満。「空手以外にも職業を持っており、主な収入は空手以外から得ている」が37%。と最も多く、「空手で収入を得ていない」も2割程度。



※「全体」と比べて ■ + 10 pt以上 ■ + 5 pt以上 ■ - 10 pt以下 ■ - 5 pt以下 (n=30未満は除く)

● 空手発祥の地『沖縄』の認知

- 沖縄が空手発祥の地であることは、沖縄県内では96%が認知していると回答。「確かに知っている」も7割と高い。
- 一方で、日本国内における認知率は35%にとどまり、「確かに知っている」は1割強。50代・60代以上においては認知率が4～5割弱と全体に比べるとやや高い。

県内			N=	確かに知っている	なんとなく知っている	知らなかった	認知計 (%)
全体		(200)		70.5	25.5	4.0	96.0
性別	男性	(100)		72.0	25.0	3.0	97.0
	女性	(100)		69.0	26.0	5.0	95.0
年代別	10代	(*13)		76.9	15.4	7.7	92.3
	20代	(*27)		81.5	14.8	3.7	96.3
	30代	(39)		69.2	20.5	10.3	89.7
	40代	(41)		75.6	22.0	2.4	97.6
	50代	(41)		58.5	39.0	2.4	97.6
	60代以上	(39)		69.2	30.8		100.0
空手魅力度別	魅力を感じた計	(124)		86.3	11.3	2.4	97.6
	とても魅力を感じた	(34)		91.2		8.8	100.0
	どちらともいえない	(56)		50.0	44.6	5.4	94.6
	魅力を感じなかった計	(*20)		30.0	60.0	10.0	90.0

(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

国内			N=	確かに知っている	なんとなく知っている	知らなかった	認知計 (%)
全体		(400)		12.8	21.8	65.5	34.5
性別	男性	(200)		20.0	28.0	52.0	48.0
	女性	(200)		5.5	15.5	79.0	21.0
年代別	10代	(*25)		4.0	16.0	80.0	20.0
	20代	(53)		9.4	13.2	77.4	22.6
	30代	(67)		14.9	19.4	65.7	34.3
	40代	(79)		12.7	11.4	75.9	24.1
	50代	(66)		12.1	28.8	59.1	40.9
	60代以上	(110)		15.5	31.8	52.7	47.3
空手魅力度別	魅力を感じた計	(183)		21.3	26.8	51.9	48.1
	とても魅力を感じた	(35)		42.9	22.9	34.3	65.7
	どちらともいえない	(126)		6.3	19.8	73.8	26.2
	魅力を感じなかった計	(91)		4.4	14.3	81.3	18.7

(*)基数が少ないため参考値

【基数：対象者全員】

世界の空手

【空手愛好者人数】

1億3000万人

【競技人口】

3500万人

【団体数・道場数】

現在は流派会派がくずれ、各地域から競技団体を合成する形になっており、道場＝団体といった形になっている。

【流派数・流派ごとの団体数・流派ごとの道場数・流派ごとの人数】

最大の流派は、松涛館流。国際大会を見れば、60～70%が松涛館流の形を演武。



国内・海外の空手道愛好者数（2016年3月8日）

日本国内 愛好者 = 200万人

世界全体 愛好者 = 1億3000万人

【世代別内訳】	人数
小学生・幼児	1,000,000
中学生 (中学武道必修教育含む)	200,000
高校生 (部活動所属者含む)	200,000
一般	600,000
日本国内 計	2,000,000

【主な国別内訳】	人数
インドネシア	5,000,000
インド	4,900,000
エジプト	4,000,000
イラン	1,300,000
日本	2,000,000
フランス	1,000,000
ブラジル	500,000
トルコ	250,000
イギリス	250,000



上記データ出典：空手道マガジン月刊JKFan編集部調べ